自分ができそうな被災地の農業再生について

私は、この講義を受け、指定の資料を読み、被災地の農業再生には様々な方法で貢献できると感じた。その中で最も有効で現実的なのが「被災地の現状や正しい知識」を多くの人に伝えてくことだと思った。

そのためにはまず、正しい知識を得ることが重要である。今日の社会では正しく客観的な情報は非常に入手しづらくなっている。講義で取り上げられた東京新聞の記事の例のように、現地の情報は各メディアや関係者の様々な思惑や利害関係によって加工されて我々の元に届く。これらの情報のみを鵜呑みにしてしまっては視野の狭い偏向的な意見しか持てなくなってしまう恐れがある。よって正しい知識を得るために、現場の情報、あるいは現場により近い情報を得るために、能動的に情報を求めていくことが大切だと考える。幸いなことに私は東京大学農学部の学生という身分にあり、知識を得るには非常に恵まれた環境にある。実際、放射線環境学の講義では新聞やネットではなかなか得られない様々な「生の」知識を得ることができた。このように学生の身分を活かして様々な講義や活動に手を出してみることで良質な情報がたくさん得られると考えられる。

しかし、講義だけでは資料で取り上げられたような「現場を知らない人間」になってしまう。「現場を知らない人間」ではなく「現場を知り、被災地問題を自分事として取り組める人間」にならなければ正しい思考や行動はできない。現場を知るには、やはり現場に行く他に方法はないと思う。1 度だけでも現場を見れば、講義やニュースでしか知らなった「机上の知識」が現実の情報になり、自分事の現実になると思う。

正しい知識を得て、現場に行ったら、次は得られた情報を広めていくことが重要だと考える。日常生活で会話していると、たまに原発事故関係の話題が出る（原発の是非、福島産農作物の安全性について等々）。そのような時に、講義や現場を通じて得られた生の知識を広めていきたい。話していけばそれらの真新しい情報に興味を持つ人間もいるだろう。そのような人間が自分の興味を様々な形で行動に移していけば、様々な形で被災地に貢献できる。このように、被災地の情報を広めていくことは、間接的に被災地に貢献する大きな役に立つであろう。

以上のように、幅広い情報を入手し、現場に足を運ぶことでその情報を消化し、それを身の回りの人間に広めていくことが、私のできる被災地の農業再生だと考える。被災地の問題を、講義を受けた私のような一部の人間のみならず、多くの人間が自分事として真剣に考えれば多くの問題は解決へと近づいていくだろう。

本題とは少し逸れるが、資料を読んで最も強く感じたことは「行動することの重要さ」である。「クリスマスイブの霜柱」のように興味のあまりなかった学問に足を踏み入れたり、他の 3 つの資料で取り上げられた農家自身ができる除染法を編み出したりするのも、実際に行動することで転がり込んできた些細なきっかけが様々な出来事や出会いを経て起きたことである。これは 1 本の藁から幸せな暮らしを掴む「藁しべ長者」に少し似てい

る。大事なのはまず１本の藁を掴むことなのである。私自身が被災地への思いを行動に移せば、その小さな行動によって、様々な出会いや機会に巡り合い、いつしかは思いもよらないような事まで成し遂げられるのではないかと思う。